

OBSキャンプのスキル

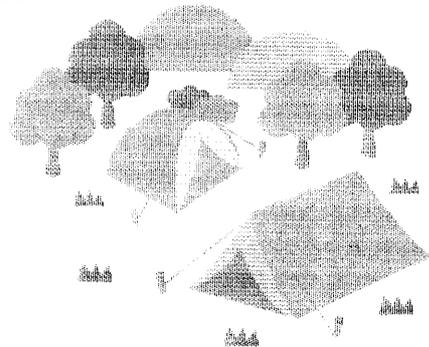
基本コンセプト

極力、跡を残さない（Leave No Trace）キャンプ生活

人間が自然の中に入り込むことで、環境変化を引き起こすことは避けられない。しかし、自然に触れることで「リラックスできる。」など得られる物も多い。さらにこうした「自然の一部として共生する」体験は、参加者自身のその後の環境問題への関わり方を大きく代える力をも持っている。

では、自然からの恩恵を受けながらも、そのダメージを最小限にとどめる方法はどうかあるべきなのか。以下の点で、我々が努力していることについて述べる。

- ① キャンプサイトを選ぶ
- ② 出した物は持ち帰る（ゴミの考え方）
- ③ 持ち帰れない物の処理
- ④ 火に関すること
- ⑤ その他について



① キャンプサイトを選ぶ

多くの人間が、間隔をあけずに一定のサイトにとどまることは、自然の回復力を越えてしまい、そのサイトの大きな環境変化を起こす危険性がある。そこで OBS キャンプでは、遠征旅行という形態を取っている。（もちろん、遠征旅行自体の持つ教育的効果が最も重要な要素だが）しかしこれでは、毎回サイトを変えていくので、インパクトを広範囲に広げることになってしまう。

では、人間が入り込む以上避けられない自然へのダメージを最小限にとどめるために、どのようなサイトを選ぶことが好ましいのか。我々は、次の2点を共通理解している。

- ・トレイルから50m以上離れていることが好ましい。
- ・一般ハイカーから目に付きにくいように入り口は目立たなくする。
→ 出入りも踏み跡を残さない工夫

②出した物は持ち帰る（ゴミの考え方）

ゴミの持ち帰りは、我々が最も努力できることである。

ア. 事前に減らす

食料は、事前に極力包装をはずし、詰め替え可能な容器などに移し替えることができる。ゴミの減量に役立つということは、荷物の重さを軽減することができるとも言える。

イ. 分別する

現在、4分別で行っているが、今後はさらに細分化されていくと思われる。

燃えるゴミ（生ゴミを含む）、プラスチック類、瓶・缶・ペットボトル、電池



ウ. 小さな誇り

指導者が、移動中に他のハイカーがうっかり落としてしまったキャンディーの包み紙などのゴミを、そっとポケットに忍ばせて持ち帰ることは、よい自然管理の姿を示すことができる。参加者が行えば、こうした実際の行動は、小さな誇りとして参加者のおみやげとなる。

・たった一つではなく、確かな一つ。

エ. 残飯、汚水の処理

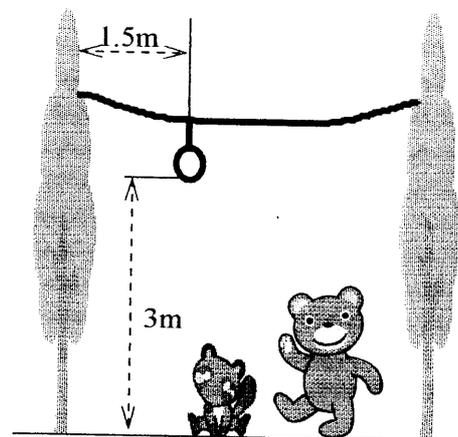
当然ながら、残飯は残さない。残飯を出すことは、そのゴミをコース終了まで持ち歩くことであり、体力面からも避けるべきである。そのためには、クリーンナップで鍋や食器についた物をいかに食べ尽くすかが重要である。油污れなども、コーヒー殻や紅茶のパックなどを使うことで、かなり取り除くことができる。慣れてくれば、鍋、食器のクリーンナップにトイレットペーパーをほぼ使わずにすませることができる。

どうしても出てしまった汚水は、猫の穴（キャットホール）を掘りサンプスクリーンでこして流し込む。

オ. 食料・ゴミの持ち歩き

保管の仕方によっては、野生の動物が食べ散らかしてしまうことになりかねない。動物たちがこうして人間の食料を簡単に得てしまうことは避けなければならない。サイトに着いたら、食料・ゴミは樹上につるすことが大切である。

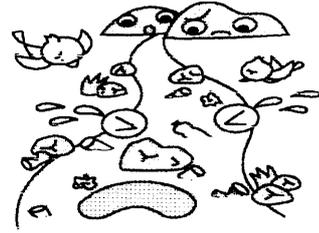
・高さは3m以上ある事が望ましい。



③持ち帰れない物の処理

近年富士山に代表される日本の山々で、ハイカーの糞尿問題が大きくクローズアップされてきた。

糞便については、ある程度の量を正しく処理すれば、土中の微生物が生分解してくれるのだが、場所が悪いと流出して水源に流入してしまったり、動物が掘り返したりしてしまうこともある。また、本来日本には存在しなかった寄生虫が糞便を介して海外より入り込んでいるという報告もある。



処理法としては、

(最も好ましい)・全て持ち帰る。

(講習会推奨)・ふき取りには、自然物(葉など)を使い、全て埋める

・ふき取りに使った紙は持ち帰り、本体は埋める。

(本キャンプ標準)・全て埋める。

埋める場合の場所としては、

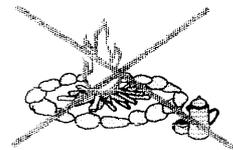
- ・ **水場より50m以上離れている**こと。(寄生虫の移動距離より)
- ・ **深さは腐葉土のある範囲(10~20cmくらい)**
- ・ できるだけ周囲の土と混ぜ合わせて、よく**こねしてから埋め戻す**。
- ・ 埋めたところが分かるように**目印を付ける**。(枝をたてる、×にする)
→石は置かない。石が熱を奪い分解が極端に遅れる。

尿の方はほとんど無害ということだが、においや塩分が動物を集めることもある。岩場や砂地であれば好ましい。

沢の水の味をぜひ後世の子どもたちにも味合わせたいと思う。水源の保全・確保はこれからもっと検討していくことになる。

④火に関すること

山火事や土中生物へのリスクを減らすため、原則として直火でたかない。装備としてガソリンストーブやガスストーブを持ち込んでいる。マッチを使っているが、燃えさしの処理にも気をつけたい。



⑤その他について

- ・ テントは意外にその下の環境に負荷をかけている。そこで雨などの例外を除き、テントはできるだけ朝早くには畳んでしまい、地面の回復をはかる。